

琉球大学学術リポジトリ

全国学力・学習状況調査における沖縄県の中学校国語科の結果考察：
国語Bの記述式問題と生徒質問紙の結果の関連を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教職センター 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上江, 朝男, 太田, 寛, 仲松, 研, 平田, 幹夫, Uezu, Asao, Ota, Hiroshi, Nakamatsu, Ken, Hirata, Mikio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45027

全国学力・学習状況調査における沖縄県の中学校国語科の結果考察

国語Bの記述式問題と生徒質問紙の結果の関連を中心に

上江洲朝男ⁱ・太田寛ⁱⁱ・仲松研ⁱⁱⁱ・平田幹夫^{iv}

Asao UEZUⁱ, Hiroshi OTAⁱⁱ, Ken NAKAMATSUⁱⁱⁱ, Mikio HIRATA^{iv}

Current Status of Japanese in Okinawa Prefecture Junior High Schools- Analysis of Student Assessment on the Nationwide Academic Achievement Survey-

Focusing on the Correlation between Japanese B, and Performance the Survey of Student Learning Environment.

本研究では、平成30年度全国学力・学習状況調査における全国の中学校の平均正答率と沖縄県の平均正答率との差を、全国的に課題とされている国語B問題の記述式問題に焦点を当て、比較し、考察を行った。また、記述式の正答率の向上に関して、生徒質問紙国語Bやその記述式の結果とのクロス集計の推移とその関連の考察を行った。その結果、「学習に対する粘り強さ」や「めあて、まとめ、振り返り」の充実、「読書活動との相関」高さなどが明らかになった。今後の授業改善において、国語科授業における図書館利用の工夫、県や他機関等との連携による読書活動の充実、生徒が本時の学びを実感できる質の高い振り返りの模索、根拠を持って自分の意見を記述する力を高めるための他教科との連動、国語科教師自身の生徒の記述を問題の条件と照合して見取る力の養成などが示唆された。

はじめに

全国学力・学習状況調査がスタートしたのは平成19年度である。平成30年度でその実施は11回目^vを迎えた。図1は、これまでの科目別全国差の推移を表すグラフである。調査が開始した平成19年度の沖縄県の中学校の結果をみると、全国の平均正答率との差^{vi}（以下、「全国差」と用いる）において、国語Aが-7.3ポイント、国語Bが-8.0ポイントと国語A、B問題のいずれにおいても大きく下回っていることがわかる。

国語A問題においては、平成26年度から全国平均との差が-5ポイント前後で推移し、国語B問題においては、平成25年度から全国平均との差が-5ポイント前後を推移してきている。文部科学省は±5ポイント以内を全国水準の域だとしていることから、中学校国語科においては全国平均を下回ってはいるものの全国水準に達している状況だと言える。^{vii}

平成30年度の「全国学力・学習状況調査 報告書」に国語の「(1) 調査問題の趣旨・内容、課題等、指導改善のポイント」の中で、「場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解することはできている〔A③二、B③一〕。」とある。その一方で、「情報を整理して内容を的確に捉えることに課題がある〔A⑤二、B①一、B①三、B③三〕。」と指摘している。^{viii}

本研究においては、全国的な課題を踏まえ、国語B問題を選択・短答式問題と記述式問題に分類して比較した上で、記述式問題における沖縄県の中学校国語の成果と課題を明確にしたい。さらに、生徒質問紙の結果との関連からどのような相関がみられるかを考察し、課題解決に向けた提言をしたい。

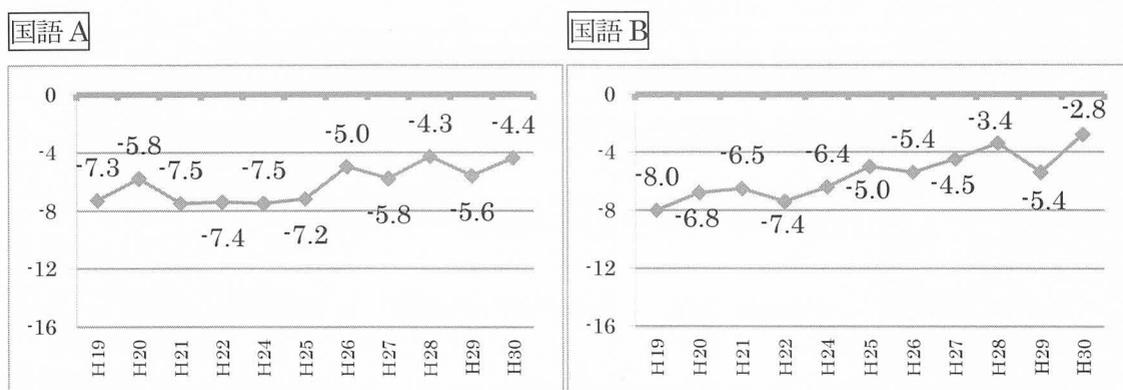


図1 国語 A・B 問題における全国差の推移(H19~H30)

1 本研究における着眼点

国語B問題の各設問を選択・短答式と記述式の二つに分類し、それぞれの全国差のこれまでの推移を示したのが図2である。中学校国語Bの結果を全国差の推移で見ると、全体的には右肩上がりになっており、上昇傾向にあることがわかる。国語B問題における記述式問題は全九設問中三問しかないことから、年度による記述式の結果は、選択式・短答式と比較して大きく変動する傾向が見られる。^{ix}

平成30年度においては選択式・短答式問題の全国差が-3.4ポイント、記述式問題の全国差が-1.7ポイントとこれまで最も小さい結果となっている。

このことから、全国学力・学習状況調査における沖縄県中学校国語B問題の選択・短答式問題、記述式問題はどちらも上昇傾向にあることが言える。本研究においては、その中でも、全国的に課題の大きい国語B問題の記述式問題を中心に生徒質問紙との関連も踏まえて、沖縄県の学習状況の調査結果を分析し、沖縄県教育委員会の教育施策の成果と課題を明らかにしたい。

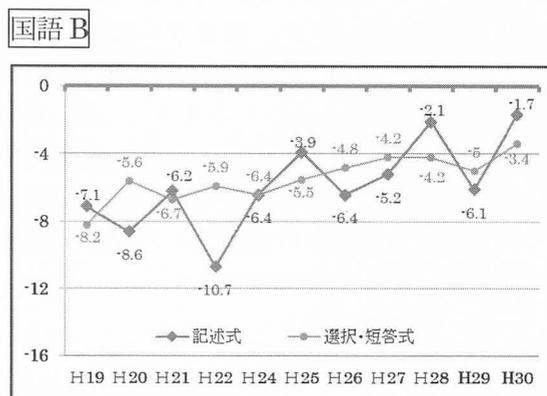


図2 出題形式による全国差の推移(H19~H30)

2 全国学力・学習状況調査の概要

調査目的 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

調査対象 中学校第3学年、義務教育学校後期課程第3学年、中等教育学校前期課程第3学年、特別支援学校中学部第3学年

調査日時 平成30年4月17日（火）〈全国学力・学習状況調査〉

調査対象人数（全国及び沖縄県）

	国語 A	国語 B	質問紙
全国(公立)	966,764	966,786	966,886
沖縄県	14,063	14,060	14,080

3 中学校国語 B における記述式問題の結果

(1) 中学校国語 B における記述式問題の正答率

図3は国語B問題における各年度・大問毎の記述式問題に対する正答率の全国差を示したものである。

平成24年度までは設問毎の平均正答率の差が-8.0ポイントを超える設問が見られたが、平成25年度以降は改善の傾向が見られる。平成30年度には、すべての記述式問題の正答率が-5.0ポイント以内となっており、初めて、記述式の問題で全国平均正答率を上回ることができた設問があった。

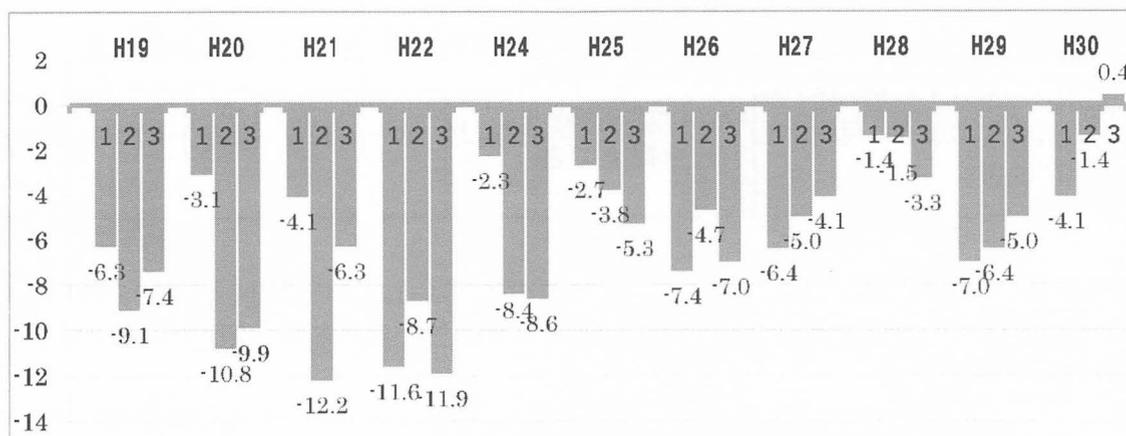


図3 中学校国語Bにおける大問毎の記述式問題の正答率の全国差の推移

(2) 中学校国語 B における記述式問題の関連問題の推移

ここでは、沖縄県が中学校国語B問題の記述式問題で始めて全国平均正答率を上回った平成30年度の大問3三を中心に述べる。

平成30年度大問3三の問題の趣旨は「相手に的確に伝わるように、あらすじを捉えて書くことができるかどうかをみる」とある。学習指導要領における領域・内容においては、第1学年C読むことイ「文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること」である。

中学校国語B問題の記述式問題の作成にあたっては、大きく次の2点、①「解釈や説明をする」と、②「感想や意見を述べる」

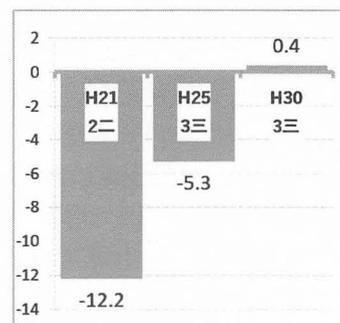


図4 関連問題における正答率の全国差の推移

に分けることができる。^x

平成30年度に全国平均正答率を上回った設問と同様な趣旨や領域である問題を関連問題として取り上げ比較する。取り上げた問題は、平成21年度[2]三と平成25年度[3]三である。

図4は、関連した3問の全国差の推移を示したものである。また、下表1は抽出した3問の「概要」「出題の趣旨」全国と沖縄県の「正答率」「無解答率」「平均正答率差」を詳述して表にしたものである。

表1 関連問題における「出題の趣旨」「正答率」等

設問	設問の概要	出題の趣旨	問題形式	正答率		無解答率		平均正答率差
				沖縄	全国	沖縄	全国	
H21 [2]二	本文の内容を適切にとらえ、発光ダイオードの特徴を箇条書きで三つ以上書く	文章から必要な情報を読み取り、簡潔にまとめて書く	記述式	54.2	66.4	18.4	13.1	-12.2
H25 [3]三	間違えやすい漢字を学習する際の注意点やコツを、漢字の特徴を取り上げて説明する。	漢字の特徴を捉えて、自分の考えを具体的に書く	記述式	59.3	64.6	5.8	5.4	-5.3
H30 [3]三	話のあらすじを学級の友達にどのように説明するかを書く	相手に的確に伝わるように、あらすじを捉えて書く	記述式	49.6	49.2	12.7	12.4	0.4

平均正答率の差を見ると、平成21年度大問[2]二の問題は-12.2ポイント、平成25年度大問[3]三が-5.3ポイント、平成30年度大問[3]三が+0.4となっている。徐々に全国との差を縮めてきたことがわかる。

次に「無解答率」で比較してみる。記述式の場合、選択・短答式と比較して無解答率が高くなる傾向がある。平成21年度は、大問[2]三において、全国より無解答率が5.3ポイント高い結果であった。平成25年度と平成30年度をみると、それぞれ無解答率の差が全国より0.4ポイント、0.3ポイントとなっており、沖縄県における無解答率の全国差は縮まってきていることがわかる。以上の結果から、記述式問題においても空欄にせず、記述する生徒が増えてきたことがわかる。しかし、平成25年度の大問[3]三の正答率をみると、全国差は-5.3ポイントとなっている。無解答率は改善されてきたにもかかわらず、依然、正答率は低いという結果から、解答類型を省察する必要があると考えた。そこで、解答類型による課題分析を試みる。

解答類型における正答は、「解答に必要な条件を全て記載していること」が必須条件である。平成30年度大問[3]三の設問においては、解答類型1「条件①、②を満たしているもののうち、話の全体を取り上げて解答」しているもの、解答類型2「条件①、②を満たしているもののうち、話の一部分を取り上げて解答」しているものの2型を挙げている。誤答と判定される解答類型3と4は、それぞれ「条件①を満たし、条件②を満たさないで解答しているもの」、「条件②を満たし、条件①を満たさないで解答しているもの」となっている。解答類型99は、それ以外の解答ということになる。表2、3、4は前述の三問における解答類型と反応率を表に示したものである。

平成21年度と平成25年度を比較すると、正答率と無解答率は改善しているが、解答類型99

は平成 21 年度が 3.7 ポイント、平成 25 年度は 3.5 ポイントと依然全国との差が大きいままとなっている。平成 25 年度と平成 30 年度を比較すると、無解答率は差がないが、正答率が - 7.0 ポイントから + 0.4 ポイントまで 7.4 ポイント改善している。解答類型 99 は 3.5 ポイントから 1.1 ポイントまで 2.4 ポイント改善している。

表 2 平成 21 年度 2二の解答類型と反応率

H21 2二	(正答の条件)問題に示された条件にしたがって、発光ダイオードの特徴を書いている。 ①文章【A】に書かれている発光ダイオードが次世代の明かりとして注目されていることが分かる特徴を適切に書いている。 ②簡条書きで三つ以上書いている。	沖縄県	全国
1◎	条件①, ②を満たして解答しているもの	54.2	66.4
2	条件①を満たし, 条件②を満たさないで解答しているもの	3.1	1.7
3	条件②を満たし, 条件①を満たさないで解答しているもの	16.3	14.5
99	上記以外の解答	7.9	4.2
0	無解答	18.4	13.1

表 3 平成 25 年度 3三の解答類型と反応率

H25 3三	(正答の条件) 次の条件を満たして解答している。 ①A と B のいずれか一つの〈間違いやすい漢字の例〉を選んで, その記号に○を付けている。 ②選んだ〈間違いやすい漢字の例〉について, 二つの漢字の共通点や相違点など漢字の特徴を適切に取り上げて書いている。 ③条件②に応じて, 二つの漢字を学習する際の注意点やコツを具体的に書いている。 ④七十字以上, 百十字以内で書いている。	沖縄県	全国
1◎	条件①, ②, ③, ④を満たして解答しているもの	59.3	64.6
2	条件①, ②, ③を満たし, 条件④を満たさないで解答しているもの	0.8	0.8
3	条件①, ②, ④を満たし, 条件③を満たさないで解答しているもの	7.2	6.0
4	条件①, ③, ④を満たし, 条件②を満たさないで解答しているもの	8.0	7.9
99	上記以外の解答	18.8	15.3
0	無解答	5.8	5.4

表 4 平成 30 年度 3三の解答類型と反応率

H30 3三	(正答の条件) 次の条件を満たして解答している。 ①話の展開を適切に取り上げて書いている。 ②七十字以上, 百二十字以内で書いている。	沖縄県	全国
1◎	条件①, ②を満たしているもののうち, 話の全体を取り上げて解答しているもの	24.4	30.3
2◎	条件①, ②を満たしているもののうち, 話の一部分を取り上げて解答しているもの	25.2	18.9
3	条件①を満たし, 条件②を満たさないで解答しているもの	1.0	0.8
4	条件②を満たし, 条件①を満たさないで解答しているもの	32.7	34.7
99	上記以外の解答	3.9	2.8
0	無解答	12.7	12.4

〈◎が正答〉

4 中学校国語Bにおける記述式問題の結果の考察

(1) 中学校国語Bにおける記述式問題の正答率の考察

全国学力・学習状況調査における中学校国語B問題の全国差の改善は、選択・短答式問題だけによるものではないことがわかった。記述式問題も同様に改善の傾向が見られることがわかった。国語科における授業改善が平成25年度から見られたのは、沖縄県教育庁義務教育課内に学力向上推進室の立ち上げ、「わかる授業 Support Guide」「授業における基本事項」など授業改善に目を向けた施策を推進した成果だと考えられる。

(2) 中学校国語Bにおける記述式問題の関連問題の結果の考察

正答率から授業改善が確実にすすんできたことがわかる。意図的、意識的に生徒に解釈や説明をさせる授業が増えてきたといえるだろう。無解答率の改善は、生徒が粘り強く問題に取り組み表現しようとするようになってきた。

解答類型99は、改善しつつあるが、正答率は49.6%と低いので課題もみえる。根拠をおさえた解答の記述の部分で全国との差が改善されつつあるが依然34.7%が条件不足となっており、授業改善の課題もみえる。

図5は、沖縄県が平成26年から実施した全国との採点のズレをあらわしたグラフである。県内の各学校で自校採点した結果と、実際に国立教育政策研究所より採点した結果の差を記述式のみ取り上げた。

記述式の解答のため採点する際には多少の誤差は想定できるが、平成26年度から平成30年度までの全15問中10問に10ポイント以上の差がみられる。このことは、採点をする各学校の国語科の先生方の、出題の趣旨の理解、正答になるための条件（評価規準）の把握、解答類型の分析など多くの課題があることも示唆される。

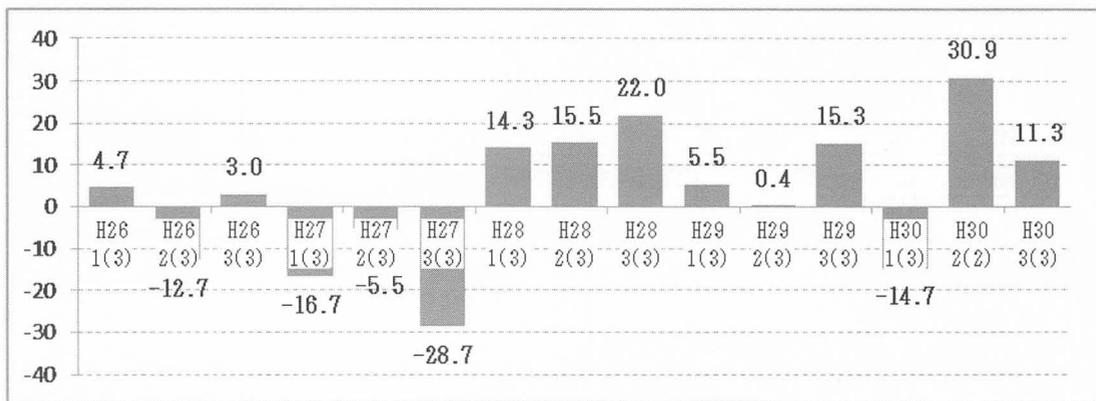


図5 各記述式設問の自校採点結果と国立政策研究所からの採点結果との差の推移 (H26～H30)

5 中学校生徒質問紙と国語Bの結果

(1) 相関係数における全国と沖縄県の比較

ここでは、全国学力・学習状況調査の中学校の生徒質問紙の結果と国語Bの正答率との関連をみていく。平成30年度より、学力調査開始当初と比べ、質問紙調査の質問数が増加してきたことから、毎年調査する項目と3年に1度調査する項目に分別し、項目数を削除している。平成29年度の生徒質問紙は94項目に対して、平成30年度では、59項目と大幅に削減したため、国語に関する質問項目は平成31年度に予定され、平成30年度はほとんど削減されている。そこで、

国語に関する生徒質問紙に関しては、直近の調査である平成 29 年度の資料を扱うこととする。

図 6 及び図 7 は、全国と沖縄県の国語に関連する質問紙の項目を、国語 B の相関係数の高いものから順に挙げた表である。ここでいう相関係数とは「2 種類のデータの関係を示す指標のこと」である。例えば国語の正答率と数学の正答率の関係を捉え、一方が増加すると、もう一方も増加する傾向にあることを正の相関と言い、一方が増加し、もう一方が減少する傾向にあった場合には負の相関という。相関係数は $[-1] \sim [1]$ の間をとり、両極、すなわち -1 と 1 に近づくほど強い相関を示し、 0 に近いほどあまり相関関係はないと考え、右表ア～エのようにとらえる。

なお、本項での全国の相関係数にかかる結果は国立、公立、私立の合計の結果である

全国学力・学習状況調査の場合には設問数も少ないため、相関係数は高く出ない傾向にある。ちなみに平成 29 年度は生徒質問紙と教科の全国における結果で 0.400 以上の結果は 6 項目（うち、国語 B に関する結果は 1 項目）であった。したがって、本調査では、上記のイの範囲にあって全問題の中では相関関係は強いものとしてとらえる。

ア	$0 \leq r < 0.2$	ほとんど相関はない
イ	$0.2 \leq r < 0.4$	弱い正の相関
ウ	$0.4 \leq r < 0.7$	正の相関
エ	$0.7 \leq r < 1$	強い正の相関

①相関係数の高い質問事項

平成 29 年度の国語に関する質問事項と、国語 B との相関係数を表にして表し、全国と沖縄県比較を試みる。

表 5 生徒質問紙と国語 B の相関係数における全国と沖縄県の比較

質問番号	質問事項	沖縄県		全国	
		相関係数	順位	相関係数	順位
(79)	今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありました。最後まで解答を書こうと努力しましたか	0.398	1	0.466	1
(74)	読書は好きですか	0.264	3	0.237	4
(63)	1,2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか。	0.249	4	0.131	36
(78)	国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由がわかるように気をつけて書いていますか	0.233	5	0.249	3

質問番号 (79) が全国・沖縄県ともに相関係数が高い結果となった。質問番号 (79), (74), (78) は沖縄県、全国とも相関係数が高い傾向にあった。特筆すべき結果として、質問番号 (63) を挙げた。質問事項は「1,2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか。」で、全国では相関係数 0.131 とあまり相関関係は見られない。しかし、沖縄県においては相関係数 0.249 と 4 番目に高い結果となった。

②相関係数の高い質問事項の推移

②-1 質問番号 (79) について (相関係数の高さ沖縄 1 位, 全国 1 位)

図 6 は全国、沖縄県共に最も相関係数が高かった質問番号 (79) 「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありました。最後まで解答を書こうと努力しましたか」において選択肢「全ての書く問題で最後まで書こうと努力した」の割合の推移を表したグラフである。結果を

見ると、平成24年度までは全国差が-7.0ポイントから-4.2ポイントだったのが、平成25年度以降は、-1.7ポイントから+1.1全国とほぼ同じ数値になってきている。このことは、「文章を書く」問題を最後まで書こうと努力する生徒が増えていることを示す。

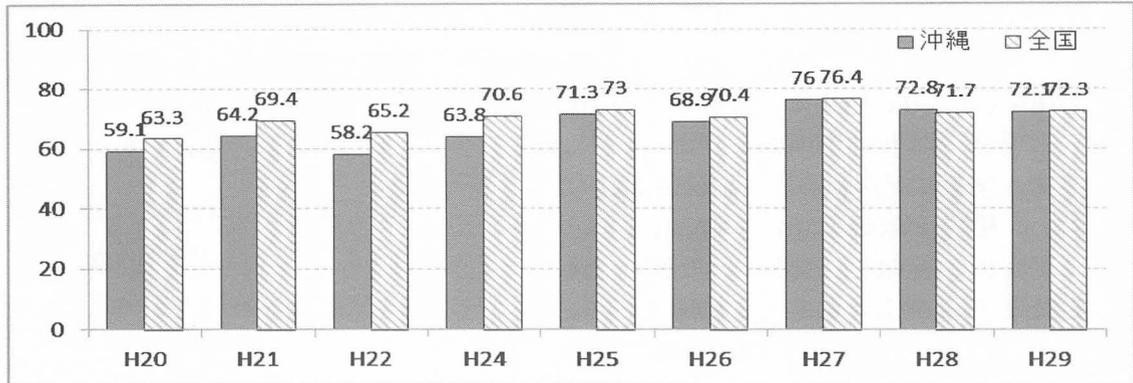


図6 質問番号(79)「今回の国語の問題について、解答を文章で書く問題がありましたが、最後まで解答を書こうと努力しましたか」において、選択肢「全ての書く問題で最後まで書こうと努力した」の割合の推移

②-2 質問番号(74)について（相関係数の高さ沖縄3位，全国4位）

「当てはまる」と回答した割合は例年大きな変化はない。常に全国と比較して6～7ポイント程度低い傾向がある。

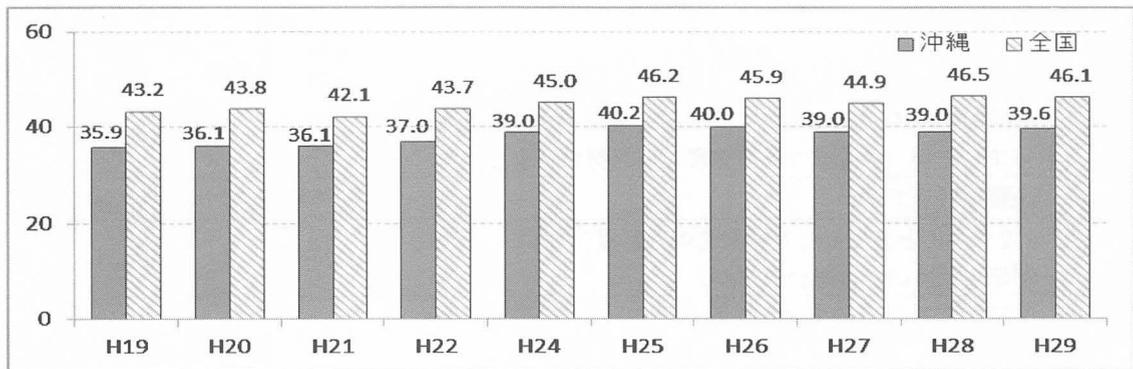


図7 質問番号(74)「読書は好きですか」において、選択肢「当てはまる」の割合の推移

図8は質問番号(74)の平成29年度の結果と平成26年度の小学校6年生の同じ質問の結果のグラフである。平成29年度の中学3年生が小学校6年生だった平成26年度の同項目の数値を比較すると次のような結果が見られた。平成26年度の時の「読書は好きですか」において「当てはまる」と答えた児童の割合は、沖縄県が48.7%，全国が48.9%であった。全国との差はほとんどみられない。しかし、中学3年になると、平成29年度の結果を見ると、沖縄県が39.6%，全国が

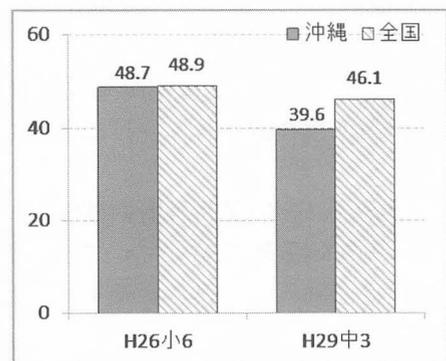


図8 質問番号(74)と国語B記述式問題とのクロス集計

46.1%となっており、6.5ポイントの開きができています。沖縄県の生徒は中学生になると読書が好きだと答える生徒が減少していることがわかった。

②-3 質問番号 (63) (相関係数の高さ沖縄4位, 全国36位)

図9は「1,2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか。」において、選択肢「当てはまる」の割合の推移のグラフである。沖縄県は常に全国より高く、平成25年度56.3ポイントから平成29年度には72.1ポイントと伸びていることがわかる。

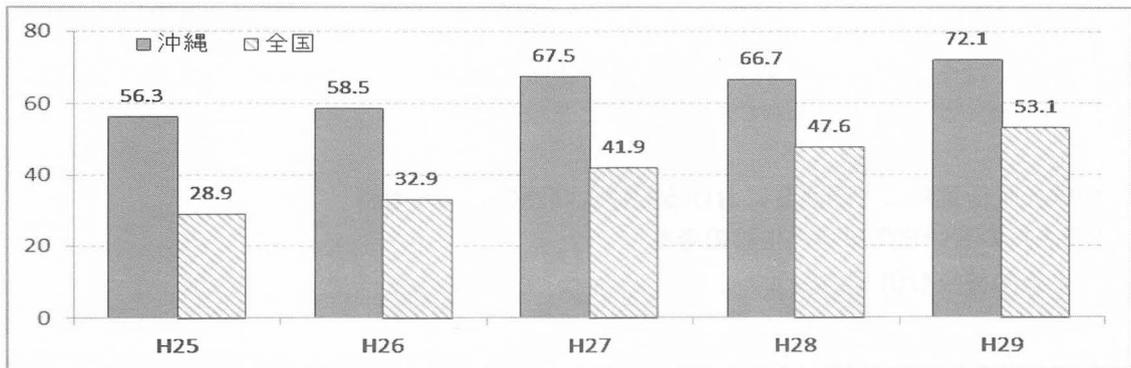


図9 質問番号(63)「1,2年生のときに受けた授業の中で目標(めあて・ねらい)が示されていたと思いますか。」において、選択肢「当てはまる」の割合の推移

質問番号(63)の項目は、「当てはまる」の回答の割合が全国より20ポイント程度高く、沖縄県の特徴的な項目であると言える。そして、相関係数も高いことから、沖縄県では授業の中で「めあて・ねらい」の設定が効果的に働いている傾向であると考えられる。

図10は質問番号(63)と国語B記述式問題とのクロス集計の結果のグラフである。全国では、「1当てはまる」と回答した場合と「4当てはまらない」と回答した場合の平均正答率の差が約17.2ポイントに対して、沖縄県では30.9ポイントと明確な差があることがわかった。

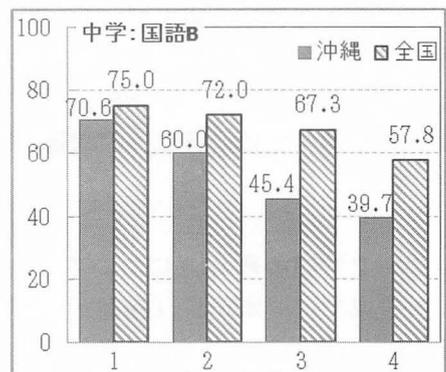


図10 質問番号(63)と国語Bとのクロス集計

②-4 質問番号 (78) について (相関係数の高さ沖縄5位, 全国3位)

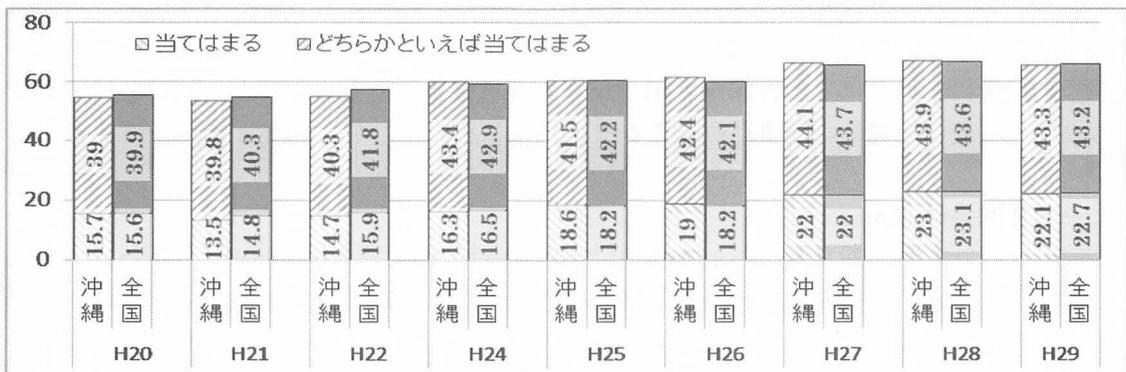


図11 質問番号(78)「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか」において、肯定的な回答をした割合の推移

図11は質問番号(78)「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか」における肯定的回答の推移を沖縄県と全国で比較したグラフである。「当てはまる・どちらかといえば当てはまる」と回答した割合が平成29年度65.4ポイントあり、平成20年度の54.7ポイントとゆるやかであるが、増加傾向にある。

図12は、質問番号(78)と国語B記述式問題とのクロス集計のグラフである。クロス集計において、「1:当てはまる」、「4:当てはまらない」と回答した生徒の平均正答率の差が、30.1ポイントと約2倍の差がでている。^{xii}

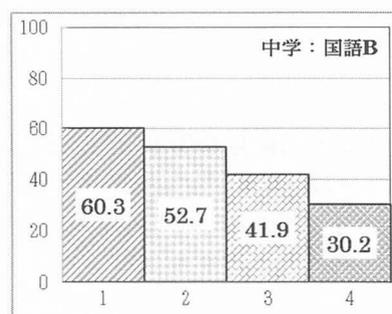


図12 質問番号(78)と国語B記述式問題とのクロス集計

6 中学校生徒質問紙と国語Bにおける記述式問題の結果の考察

(1) 相関係数の高い質問事項の推移の考察

②-1 質問番号(79)について

平成25年度より「全ての書く問題で最後まで書こうと努力した」と回答した割合が約7割となり、全国差も小さい状況となっている。沖縄県の児童生徒の長年の課題であった「問題や課題に対して粘り強く取り組む姿勢」が少しずつではあるが培われつつあることを示しているのではないか。

この時期に、沖縄県は教育庁義務教育課内に学力向上推進室を立ち上げ、授業改善に目を向けた施策の推進に取り組んでいる。県全体として「目指す授業像」を共有することで、沖縄県内の先生方の間で、授業において粘り強く問題に取り組む指導に繋がり、ポイントの向上につながったものとする。また、全国においても、本項目では沖縄県と同様な傾向が見られる。全国と同様に、沖縄県では授業改善の機運の高まりが全国との平均正答率の差を縮めてきた要因の一つと考える。

②-2 質問番号(74)について

沖縄県では、本項目（読書）で相関係数がやや高い傾向を示した。しかし、図7のグラフから小学校においては全国と同等だった「読書を好き」な児童が中学3年生になると読書離れが生じ、全国との差を6.3ポイントも広げている結果が得られた。読書活動は、質の高い言語活動を日常化できる一つの方法であることを考えると、「読書を好き」と回答する生徒の割合を高めていくことは重要である。近年、中高生の読書離れの傾向があると危惧されている。部活動や塾、PCやゲーム、スマホ等中高校生を取り巻く様々な要因が推測はされるが、全国との開きが大きくなるという原因を解明していく必要があるだろう。今後、「沖縄県子どもの読書推進協議会」等と連携しながら、原因の解明し、分析した上で、対策を講ずることが急務だと考える。また、日々の国語の授業においては、図書館を利用したり、教材以外の文学作品などに触れる機会などを増やしたり、生徒の自発的な読書活動をこれまで以上に推進していく必要があると考える。

②-3 質問番号(63)

沖縄県では、「わかる授業 Support Guide」「授業における基本事項」等を通して、「めあて・まとめ・振り返り」を意識した完結型の授業を推進してきた。ここ数年で、学校現場では完結型の授業が浸透し、かなり定着が図られている。全国では相関関係が低いものの、沖縄県ではクロス集計においても、「当てはまる」と回答した生徒の平均正答率が高いことからこの施策が、一定の成果

を上げているものと捉えられる。秋田県は「当てはまる」と回答した割合が82.1%を示していて、平均正答率においても高い成果を上げている。沖縄県は平成30年度も引き続き授業改善の重点項目に「めあて・まとめ・振り返り」をあげていて、さらなる定着と、意図を明確にした発問、生徒自身が本時の学びを実感できる振り返りの実施等の質の向上が求められている。

②-4 質問番号(78)について

国語以外の学習でも自分の考えを書くときに、理由を明確にして記述することは重要である。本項目で肯定的な回答した生徒は全体の3/4となったが、「当てはまる」と回答したより積極的な生徒の割合は約22.1ポイントであった。このことから授業の中で、「理由を明確にして記述する」指導を、他教科とも連動しながら一貫した指導が必要だと考える。特に、4の考察の(2)でも示したが、県内の国語科の先生方は記述式問題への指導や分析に多くの課題があると考えられる。このことから、日常の授業作りにおいて記述指導をする際には、その趣旨の意図や目的を明確にし、評価規準の把握など教材研究を十分に行い、生徒の記述の質を高める指導が重要になると考える。

7 まとめ 全体を通しての考察

本県の全国学力・学習状況調査における中学校国語の結果は、平成25年を境に全国水準（全国差±5ポイント以内）に近づく上向きな変容の兆しが表れた。その要因の一つとして沖縄県では学力向上推進室を立ち上げ、授業改善に焦点化した施策を行ったことが考えられる。沖縄県では、目指す授業像を明文化した施策を通して、統一性のある方向性を示し、共通認識の下、県内全域で日々の授業改善を進めたことが一定の成果を上げたことと示唆される。

小学校においては短期間に全国水準に到達するという成果が得られた。しかし、中学校においては小学校と比較すると、伸びは緩やかだったことは否めない。その原因として、推測できることをいくつか挙げておく。中学校は教科担任制のため、これまで教科を横断した授業研究が進まなかった経緯がある。また、沖縄県は生徒数100名以下の学校が全体の40%を超えており、同教科1名の学校も多く、また島嶼県のため、近隣校との連携も難しい学校が多いため、一人で教材研究・授業研究を行っている先生方も多くいるものと考えられる。近年では子供の貧困問題に焦点が当てられ、これまでわからなかった沖縄県の子供の貧困率の高さ、その影響も少なからず受けているであろう。次に、中学校で求められる「学び」の質の相違も、大きな原因の一つだと考える。中学校においては小学校よりも深い学びに至るための相応の学習過程が求められる。生徒個々に深い学びを実現するには、単に解答を出すだけの授業ではなく、言語活動の充実に向けた意図的・計画的な授業実践が必要である。小学校における言語活動に対する系統立てた実践は、学級担任制の特性を生かし全教育課程で取り組みやすい。中学校では、教科担任制をとっており複数の教科担任が連携・連動した言語活動の指導の充実には、小学校に比べて相応の時間が必要である。

本研究の結果と考察から、以下のことが明らかになった。

- ・記述式問題で最後まで書こうとする「粘り強さ」がこれまでの授業改善によって育ってきたこと。
- ・「めあて」「まとめ」「振り返り」のある完結型授業が定着しつつあること。
- ・読書活動と国語B問題の記述式問題の相関が高いこと。全国と比較において、沖縄県の中学生の読書離れが顕著であること。
- ・根拠を明確にして自分の意見を書くことが向上していること。

今後は、生徒が本時の学びを実感できる質の高い振り返りの模索することや図書館利用を工夫して取り入れた国語科授業、根拠を持って自分の意見を記述する力を高めるための他教科とも連動した授業の工夫改善が大切だと考える。

さらに、問題の条件と照合して記述を見取る国語科教師自身の力をどのように養成していくかが重要な課題だということが示唆された。読書活動においては、「沖縄県子どもの読書推進会議」など、県や他機関等との連携による読書活動の充実も課題解決の一助となるであろう。

沖縄県では、以前から「授業における基本事項」を提唱し、全職員で子供たちが深い学びに至る学習活動を語り合えることができる視点を示している。また、各教科の深い学びを実現するために「問いが生まれる授業 Support Guide」を作成し、各学校における草の根での授業作りのスタンダードを強化している。今後、各中学校の教育活動全般で、国語科を要として教科の枠を超えた言語活動の指導の拡がりを注視していく必要がある。

沖縄県の指導主事による授業参観及びその後の懇談を多く実施している。言語活動が取り入れられ、生徒主体の学習スタイルが一般的になりつつある。今後は活動のみではなく、その活動を通して何を身につけさせるのか、明確な授業が求められる。

ⁱ 琉球大学教職センター

ⁱⁱ 沖縄県教育庁義務教育課

ⁱⁱⁱ 沖縄県教育庁義務教育課

^{iv} 琉球大学教職センター

^v 平成30年度でその実施は11回目とあるが、平成22年度、24年度は抽出調査及び希望利用方式による実施。平成23年度は東日本大震災により未実施。

^{vi} 本論では、年度ごとに問題の難易度が変動することを念頭に置き、平均正答率ではなく、全国の平均正答率と沖縄県の平均正答率との差でみていくこととし、その差はポイントで表すこととする。

^{vii} 文部科学省 国立教育政策研究所「平成28年度全国学力・学習状況調査報告書」の15頁、(5)都道府県の状況に、「ほとんどの都道府県が平均正答率±5%の範囲内にあり、大きな差は見られない」としていることから、全国水準を平均正答率±5%の範囲内と捉え、全国差においても同様にとらえた。

^{viii} 文部科学省 国立教育政策研究所「平成30年度 全国学力・学習状況調査 ～児童生徒一人一人の学力・学習状況に応じた学習指導の改善・充実に向けて～ 中学校国語」p8 2018.7

^{ix} 全年度における国語B問題の大問数は、3問となっており、平成22年度以降は全9設問中、記述式問題は3問となっている。ただし、それ以前は全設問が10～11問で、うち記述式問題が3～5問となっている。

^x 文部科学省 国立教育政策研究所「平成24年度 全国学力・学習状況調査解説資料」p8

^{xi} 自校採点とは、沖縄県内の各学校で教師が採点した結果。沖縄県では、それを集計して分析等に活用している。

^{xii} 横軸の1～4は、「1: 当てはまる」「2: どちらかと言えば当てはまる」「3: どちらかと言えば当てはまらない」「4: 当てはまらない」の4つ選択肢である。